

【論説】**アメリカ議会図書館所蔵伊能大図
第116号「吉田」の深読み
—描かれた水中洲と立岩、消された吉田城主の名—**

近藤 暁夫

要旨

2001年にアメリカ議会図書館で発見された伊能大図模写図（明治初期）207枚は、現在国土地理院のホームページで全部の彩色版が公開されている。本稿は、伊能大図模写図の116号「吉田」を対象に、そこに描画されている内容の精読を通して「吉田」の図幅の特徴と、その特徴が現れた背景を明らかにすることを目的に検討を行った。

「吉田」には「水中洲」と名が付された干潟と、東海道沿いの「立岩」がそれぞれ独立して絵画的に描画されているが、これらの表現は全国すべての伊能大図のなかでも唯一とっていい特異な描かれ方をしている。全国の伊能大図のなかでも極めて異例の表現がひとつの図幅に重なることは偶然だとは考えられず、その点で「吉田」は特別な配慮が加えられた図幅だといえる。

水中洲と立岩に特異な表現がなされた理由は不明だが、伊能測量時の老中首座である吉田藩主松平信明や伊能測量隊旧知の知識人斎藤一握父子の存在など、特別な描画がなされるに十分な背景はあった。そして、現存する「吉田」の図幅で吉田城の城主名（松平信明）が欠落していることには、明治期の模写時における明治新政府・日本陸軍の意図を感じることができる。

キーワード

大日本沿海輿地全図、伊能忠敬、吉田藩、松平信明、斎藤一握、豊橋

I はじめに

1. 伊能図研究と本稿の目的

伊能忠敬(1745～1818年)とそのグループが作成した『大日本沿海輿地全図』(1821年)、およびそれに付随する途中段階で幕府に提出した地図や草稿段階の地図、伊能らが各地の大名等の求めに応じて複製した地図等を総称して『伊能図』という。また、『大日本沿海輿地全図』が幕府提出の正本・伊能家保管の副本(控図)ともに既に焼失していることから、今日においては、伊能らの作成ではないが正本・副本をもとに明治期以降に複写された地図も、広義の『伊能図』に含むのが一般的である¹⁾。伊能図は、縮尺別に「大図」(縮尺3万6千分の1、最終版で全214図幅)、「中図」(縮尺21万6千分の1、全8図幅)、「小図」(縮尺43万2千分の1、全3図幅)の3種類に大別され、このうち大図は伊能らの実測にもとづく基本図とみなすことができる。大中小図ともに正本・副本が失われているため今日伝来している伊能図には個々の図幅の精粗の差が大きいのもの、一般的に大図に最も正確かつ精密に海岸線等の地物が表現されており、地名等の地図情報も詳細であることは間違いない。

一連の伊能図とその作成プロジェクトは、日本の地図史上最大の業績のひとつとして社会的な関心も高く、多くの研究が蓄積されてきた²⁾。これらの研究は伊能忠敬個人の伝記的なものや測量事業の経緯、測量隊を受け入れた各藩の反応など主に歴史的部分に関心を寄せたものと、伊能図自体を対象にした研究に大別される。伊能図自体を対象とした研究には、伊能図の作成経緯や後世の地図に与えた影響関係、あるいは伊能図の測量や作図に用いられている技術を追求めるものが多かった³⁾が、近年は当時の海岸線を伊能図から復原し、現在と対比させる研究⁴⁾のように歴史的資料として伊能図を多様な形で活用する事例がみられてきている。そして、このとき資料として用いられるのは、専ら伊能大図である。しかし、今日においても、その知名度や資料的歴史的価値の高さに比して、特に伊能大図に関する研究の絶対量が少ないことは否めない。

伊能大図の研究蓄積が少ない最大の理由は、1873年(明治6)に伊能図の正本が、1923年(大正12年)に副本が失われた後も、伊能中図と小図については他に優れた模写本や伊能らの手による別本が伝来しておりその全容を確認することができたのに対して、全214図幅と大部な大図においては全国を網羅した

写本が確認されず、永らく極めて断片的な形でしか内容を把握することができなかったためである。しかし、渡辺一郎らの尽力によって、1997年に気象庁で伊能大図の写し43枚（現在は国立国会図書館に収蔵）が、そして2001年にアメリカ議会図書館にてほぼ全国を網羅する伊能大図の写し207枚が発見されたことを契機に、漸く伊能大図の全容が把握され、全国各地の図幅間の内容比較も可能となった⁵⁾。そして、発見された伊能大図をもとに、2006年に『伊能大図総覧』⁶⁾、2013年に『伊能図大全』⁷⁾、2015年には『デジタル伊能図』⁸⁾が刊行された。2021年現在では国土地理院のホームページで全国の伊能大図が高精細画像で閲覧可能⁹⁾になっており、一般にも広く伊能大図の全容を把握できる環境が整えられている。

しかしながら、伊能大図が広く閲覧可能になってから未だ10年程度と日が浅く、伊能大図に関する研究／伊能大図を用いた研究は、その資料の重要性や資料の持つ情報量に比して充実しているとは言い難い。もちろん、東蝦夷地（北海道）の測量線が伊能らの第1次測量による成果と最終提出版の伊能図で異なること（よって、最終版の伊能図の東北北海道部分は伊能測量隊以外の誰かの測量データを基にしたと考えられること）を明らかにした渡辺・横溝¹⁰⁾、『デジタル伊能図』をもとに伊能測量時代から現在までの海岸線の変化を定量的に把握した岩井¹¹⁾、伊能らの測量と作図全体を再検討する野上の一連の論考¹²⁾など、全国整備された伊能大図を用いた重要な研究は出されている。しかし、全国を網羅する伊能大図一枚一枚からは、本来無限ともいべき情報が引き出せるはずで、その資料としての可能性の掘り起こしはまだ始まったばかりだと評するのが適当であろう。

そこで本稿では、伊能大図の一図幅である第116号「吉田」¹³⁾（第1図）を対象に取り上げ、そこに描画されている内容の精読を行いつつ、他の伊能図との比較検討を通して、本図幅の伊能大図全体のなかでの特徴を明らかにする。本稿では特に「吉田」を取り上げるが、伊能大図は全214図幅それぞれに膨大な情報が掲載されており、それぞれを深く読図し関連史料と突き合わせることを通して、各伊能図の書誌学的特徴や当時の社会状況、地域の景観、往時の測量技術と各地の測量の実態等様々な観点から情報が引き出されることが期待できる。現在までのところ、伊能大図の各図幅に対しては、『伊能図大全』等に各図幅の簡単な解説・紹介が掲載されているほか、いくつかの図幅に対しては雑誌『伊能忠敬研究』の各号の巻頭や河出書房新社編集部編『伊能図探検』¹⁴⁾において1～2頁程度の解説がなされている。しかし、これらはその紙幅の都合上、本来伊能図の各図幅が持つ



第1図 伊能大図第116号「吉田」の全体像

・国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」より作成。

ている膨大な情報の一端を述べているにすぎない。東京世田谷区の大山街道沿いの区域を伊能図や伊能の『輿地実測録』を駆使して詳細に検討した小田¹⁵⁾のような成果も出てきてはいるが、全国を網羅している伊能大図全体からみれば蓄積が断片的なことは否めない。

伊能測量と伊能図の歴史的な重要性と社会的関心の高さ、伊能大図が持つ膨大な情報量を鑑みれば、全国214図幅の一枚一枚に対して、詳細な読図とそれを基礎とした検討・解説が整備され一般に広く供されるべきで、今後全国津々浦々の郷土史研究者や地図研究者によってそれが実現されていくことが期待される。本稿がその試みの一端としての価値を持つことができれば、目的は十分に達成されたことになる。

なお、本稿のタイトルにある「深読み」は、今尾啓介の著書『地図帳の深読み』¹⁶⁾に倣ったもので、今尾同様に地図を「じっくり眺め」(1頁)「気になるところを掘り下げ」(172頁)るという意味で用いている。本来学術論文の題目に用いる語句ではないかもしれないが、本稿は専門的な研究者だけでなく広く郷土の歴史・地理に関心を持つ一般の愛好家に対して、伊能大図への関心を高め、それぞれの図幅の読図作業への参加を促すことを目的のひとつに設定していることから、あえてこのような通俗的な用語を用いた。

2. 「吉田」概要と描画にみられる3点の特異な表現

伊能大図第116号「吉田」は、2001年にアメリカ議会図書館で発見された大図207枚の一枚であり、これ以外に「吉田」の範囲を示した最終提出版（1821年版）伊能大図の内容を伺わせる地図は伝来していない。ただし、伊能忠敬記念館には、第4次測量（1803年）までの東日本測量の成果を一旦まとめ、文化元年（1804年）に東日本全域の地図として幕府に提出した途中成果図というべき大図が残っている。この、途中成果版の伊能大図（『日本東半部沿海地図』と称される）には「吉田」にあたる図幅（以下、この途中成果版の伊能大図吉田図幅を「文化元年版」と略記する）がある（第2図）。文化元年版伊能図は全国測量の途上で制作されたもののため渥美半島や三河湾の海岸線部分しか描画されていない（東海道沿いや内陸部の測量は第5次以降に実施された）が、伊能らの手により制作され、將軍家齊への上覧に供した正本であることから、資料的な価値は極めて高い。アメリカ議会図書館所蔵の大図「吉田」は、伊能家に保管されていた最終版伊能大図（副本）を、明治初期に陸軍参謀本部陸地測量部が、輯製20万分1図作成のための骨格的基図として模写したものと考えられている¹⁷⁾。模写本ではあるが、「吉田」の海岸線の描画は伊能らの手による文化元年版と一致し、少なくとも海岸部については正確な模写がなされたことがわかる。

伊能大図は各図幅がおおよそ一枚程度に及ぶ大部な地図¹⁸⁾で、「吉田」に描画さ



第2図 文化元年版伊能大図「吉田」の全体像

・千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵。

れた範囲も東西約60km、南北約35kmに及ぶ。図幅内には、旧三河国のおおよそ南半分と、尾張国の知多郡（知多半島）にあたる領域が縮尺3万6千分の1の精度で詳細に描画されている。当時の藩域でいえば吉田藩（三河吉田藩）の大部分、田原藩の全域、西尾藩の大部分、大垣新田藩の三河国分、尾張藩の知多半島地域、若干の旗本領等が含まれている。なお、アメリカ議会図書館所蔵の「吉田」図幅は模写時の省略のために山地等の彩色がない状態で伝来しており、今日国土地理院のホームページで公開されている「吉田」図幅（第1図）はこれを下絵に他の伊能図を参考にして彩色を施したものである。

伊能図には、伊能らが直接測量を行った海岸部や街道に赤線が引かれており、これが測量線にあたる。彩色の乏しいアメリカ議会図書館所蔵版でも測量線を示す赤線は明瞭に確認でき、これが直接測量に基づく本図において最も重要な情報であることを示している。「吉田」の場合、測量線は海岸沿いと旧東海道、姫街道（本坂越え）、伊奈街道と西尾城周辺に引かれている。海岸沿いに引かれた測量線はほぼ当時の海岸線とみなすことができ、本図では島嶼部と後述する「水中洲」を除くすべての海岸線に測量線が引かれている。篠島や日間賀島、佐久島は実測されていない。

また、測量行程中、伊能らが天測を行った地点には赤線で星印が記され、「吉田」においては伊良湖村（現在の田原市）、畠村（同）、野田村（同）、田原町（同）、牟呂村（現在の豊橋市）、吉田町（同）、嵩山村（同）、北金谷村（現在の豊川市）、宮崎村（現在の西尾市）、平坂湊（同）、大井村（現在の知多郡南知多町）、師崎村（同）、東端村（同）、小鈴ヶ谷村（現在の常滑市）に記載がある。

測量線の周辺には、付近に位置する集落や寺社の位置が簡単な絵画的表現で示され、村落名や寺社名が記されている。寺社は「吉田」においては宝蔵寺（岡崎市本宿町）、砥鹿大明神（豊川市一宮町）、宇佐八幡宮（豊川市八幡町）が描かれている。宝蔵寺（法蔵寺）は徳川将軍家の先祖にあたる松平氏の菩提寺であったため特記されたのであろう。また、三河一宮であった砥鹿神社（砥鹿大明神）や当地の代表的な神社である宇佐八幡宮（社殿は現在国の重要文化財に指定されている）が描かれていること自体には違和感はないが、豊川稲荷（妙厳寺）が全く描かれていない点には若干の違和感も残る。港の記号は御馬湊（豊川市）、平坂湊の二か所に記されている。

測線周辺の山地や測量できなかった島等は横から眺めた絵画的な表現で描画さ

れていることが多い。ただし、篠島・日間賀島・佐久島は測量が行なわれておらず実際の形状とは異なるものの平面的に描画されており、これは国絵図等他の地域資料を参考にしたものだろう。また、伊能らは全国測量にあたり各地の山岳等を遠望して方位を計測する「交会法」を用いたが、山岳等の方位線は大図では描画されていない。

なお、明治期に行われた陸軍の模写は、地形図の作成の基礎資料としての活用が主目的であったことから絵画的部分については大胆な省略がなされたと考えられており¹⁹⁾、原本では山地や村落等の描写はより詳細であったろう。ただし、城郭のみは模写図でも詳細に描画されており、本図では吉田城、西尾城、田原城を確認することができる(第3図)。ただし、渥美郡畠村(現在の田原市)に立地していた大垣新田藩(1万石/江戸定府)の陣屋は、畠村が伊能測量隊の宿泊地であるにも関わらず描画されていない²⁰⁾。また、伊能大図の原本には各集落の領主名も掲載されていたと考えられる²¹⁾が、本図では欠落している。これは模写時に省略されたものと考えられる。

以上が伊能大図「吉田」の概要であるが、この愛知県の南半分がほぼ入る広大な図幅に描画されているすべての内容を限られた紙幅で述べ尽すことは困難なので、以下の本稿では特に他の伊能大図の図幅と比較して本図に特徴的な描画表現とみなすことができる次の3点に注目し、議論を進めていきたい。すなわち(1)原則干潟の描画がない伊能大図において、本図では例外的に三河湾奥部に広大な



第3図 「吉田」図幅内の3城郭の描画状態

・国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」より作成。

干潟が描画され、「水中洲」という地名まで与えられていること、(2) 内陸部の自然物の描画が極めて貧弱な伊能大図において、本図では例外的に東海道沿いに「立岩」が絵画的（写實的）に描画されていること、(3) 城郭には城主名を記すことが一般的である伊能大図において、本図では田原城と西尾城には城主名が記されているにも関わらず吉田城のみ城主名が欠落していること（第3図）である。次章では、これらの特徴的な表現について詳細を述べた上で、このような表現がなされるに至った理由を検討していきたい。

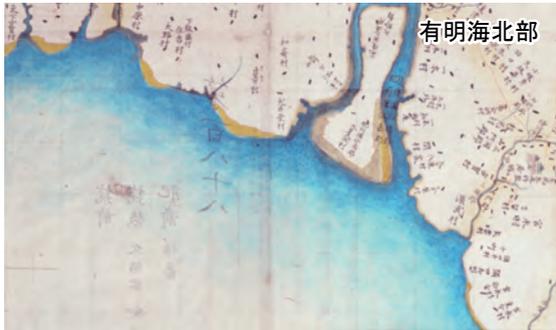
II 「吉田」の特徴的な描画とその理由

1. 水中洲

(1) 水中洲の描画が特異である理由

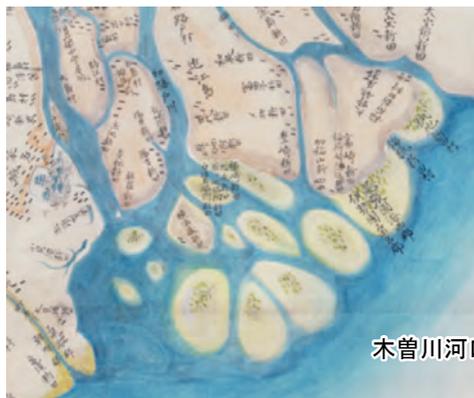
最終出版の『大日本沿海輿地全図』の名の通り、伊能らの測量事業の主な目的は日本の海岸線の姿を明らかにすることにあった²²⁾。そのため、伊能らの測量は海岸線に沿って愚直に行われ、一部島嶼を除く当時の列島のほぼすべての海岸線を網羅することになった。その一方で、海岸線（測量線）の外側（海側）の描写は極めて貧弱となり、海側に描かれているのは測量できなかった一部の島嶼や岩礁（これらは「海岸線」であるので描画するのは当然である）に限られる。

満潮時海面下に没する干潟は、伊能大図においては陸地ではない存在、海岸線の外側の存在として無視されるのが通例であり、実際に当時広大な干潟が広がっていたと考えられる江戸湾や児島湾、有明海においても干潟らしき描写は全くない（第4図）。全国の伊能大図中わずかな例外として干潟らしきものが描画されているのは、木曾三川の河口部（大図129号）に位置する干潟の一部（ただし、中洲なのか干潟なのか区別は容易でない）と、「吉田」に描かれた干潟（第5図）である。特に「吉田」の干潟は規模も大きく、三河湾内に島状に独立して描画されているものと、牟呂村（現在の豊橋市牟呂町）付近から半島状に8km超の長さで描画されているもの（以下、本稿ではこの干潟を「水中洲」と称する）の2か所描画がある点、特に半島状の干潟には「水中洲」という独自の地名が与えられている点において特異である。



第4図 干潟が描画されていない伊能大図の例

・ 国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」より作成。



第5図 伊能大図に描画された干潟

・国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」より作成。

(2) 水中洲は実在したか

「吉田」に描画される干潟のうち、湾内に島状に描画されている干潟は、伊能らの測量(1803年)から約20年後の1821年(文政4年)ごろに作成された『富士見新田見取図』²³⁾(第6図)や、1820年以前の作と考えられる『吉田御領分絵図(下図)』²⁴⁾(第7図)でも確認される。これらの史料では、干潟というよりも陸域に近いと思われる表現がなされていることから、伊能らの測量時あるいはそれ以降の近い時期には半ば陸化した状態にあったと考えることができる。しかし、「水中洲」については、これらの地図では描画がなされていない。

これまで水中洲について、星埜は「砂嘴」²⁵⁾、藤城は「海底砂州(砂質干潟)」²⁶⁾だと判読してきた。稿の著者は不明ながらも河出書房新社編集部編『伊能図探検』²⁷⁾でも「砂嘴」と記され、『デジタル伊能図』²⁸⁾においても当地は陸域として扱われている。しかしながら、砂嘴説は以下の点から現実的でない。水中洲はその名称の通り、水中にある(砂の)洲、すなわち干潟(砂質干潟)であると見なすべきである。

第一に、第6図・第7図や天保三河国絵図(1838年)などの江戸時代後期の地図・絵図類に水中洲が描画されていない。伊能測量隊ほどの正確な測量によるものでなかったとしても、これらの絵地図類は地元の地理に伊能以上に詳しい者たちが作成したのであり、仮に全長8kmに及ぶ長大な砂嘴が存在したとしたら全くそれに触れないことは考えられない。

第二に、地元の歴史資料をまとめた『豊橋市史』²⁹⁾や『牟呂史』³⁰⁾に掲載されて



第6図 富士見新田見取図(部分)

・豊橋市美術博物館蔵。



第7図 吉田御領分絵図（下図）（部分）

・豊橋市美術博物館蔵の絵図に加筆。

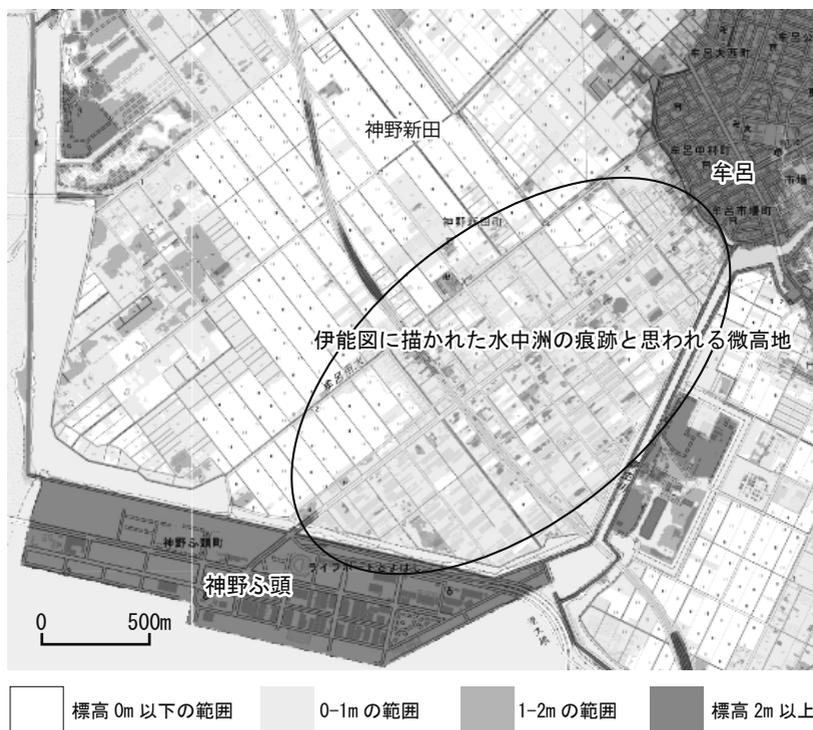
いる当時の史資料に、「水中洲」の名と水中洲と思しき砂嘴への言及が少なくとも管見の限り見当たらない。水中洲が位置する三河湾奥は漁業と水運を主業とした地域であり、そこに広がる干潟（六条潟）は大切な生業の地であり交通路であった。それにも関わらず水中洲や砂嘴の存在をうかがわせる記録がない理由は、単

純にそれが存在していないためと考えるしかない。また、仮に全長8kmを超える砂嘴が本当に存在したとすれば、それは三保松原や天橋立以上に長大な砂州・砂嘴が、19世紀初頭の三州吉田に存在したことを意味し、天下の名物として耳目を集めないはずがない。しかしそのような記録も見当たらない。

第三に、水中洲の地名が現地で一般的に用いられる固有名詞的なものでなかったのなら、伊能らが便宜的に用いた名と考えるべきであるが、仮に常時海面上に現れる砂嘴であったのなら、伊能らが「洲」に「水中」の語を付す理由がない。「水中洲」は「水中にある洲」もしくは「水に囲まれた中洲」と解釈できるが、陸域に接続された洲である以上「中洲」の意は取れない。よって、伊能らが「水中洲」と呼んだ地形は、普段水中（海中）にある洲、すなわち干潮時のみ現れる洲（干潟）と解釈するのが合理的である。

1833年（天保4年）に描かれた、田原藩の渡辺崋山（1793～1841年）による田原湾のスケッチ（田原市博物館所蔵）には、伊能図の水中洲と重なる位置に小規模ながら島状の土地が「此洲現レテカラ三カ月ナリ」の注記とともに描画されている。このスケッチには「四月十四日午時コソリ」と描いた日時（なお、特別の注記がない場合、以下の本稿では年月日は旧暦を用いる）が記されており、「ソコリ」は大潮の干潮時を指す³¹⁾ので、大潮干潮時の景観を示したものである。崋山の時代にも干潮時には長大な干潟が出現することはあったのだろう。ただし、崋山もこの洲に「水中洲」のような固有名を与えてはおらず、「三カ月」という注記からみて長大な干潟が干潮時常に現れていたわけでもないようだ。ただし、原則実見したことしか描かれない伊能図³²⁾において、伊能の測量時にはこのような長大な干潟が干潮時には現れていたこと自体は間違いない。

星埜は、水中洲が砂嘴である論拠のひとつに、現在の地形図上において牟呂から西側の神野新田として干拓されている土地で、水中洲と一致する場所に半島状の高まりがみられることを指摘している³³⁾。確かに、該当部においては、周辺よりも若干の土地の高まりが確認され、人家や牟呂用水の幹線水路もこの微高地を利用して立地していることから、微高地は神野新田の成立（明治期）以前に存在していた地形の痕跡であると見なせる（第8図）。しかしながら、当該微高地の標高はほとんどが1m以下で、これは豊橋港神野埠頭の満潮時水位（おおよそ東京湾平均海面に+1m）³⁴⁾を下回る。200年間の地盤や海面の変化や盛土等の地形改変を加味しても、この程度の微高地をもって砂嘴の存在を類推することは無



第8図 現在の水中洲付近（神野新田）の標高分布

・「地理院地図」をもとに作成。

理があり、むしろ現在の地形図上の痕跡は、干潮時には海面上に現れ、満潮時には水没する、半島のような形状をした長大な干潟がここに存在していたことの例証とみなすことが妥当である。

伊能らが測量時に作成した麓絵図や測量記録、あるいは同時代の史料に砂嘴の実在を示す証拠が今後見つかる可能性は否定しない。しかし、以上のように現状では水中洲は干潟と考えるほかない。水中洲を陸域として扱っている『デジタル伊能図』や、それを資料に伊能測量時と現在の陸域面積の変化を検討した岩井ら³⁵⁾については修正が必要となろう。

しかしながら、水中洲の正体が干潟であったとした場合、次なる問題点が出て

くる。すなわち、低潮線の測量を行わなかったため低潮線が描かれることがなく³⁶⁾、よって全くといっていいほど干潟が描画されない伊能大図(第4図)において、なぜ三河湾奥にのみ長大な干潟の描画がなされたのか、そして、同様に「浜、湾、灘などの海岸や海域の自然地名はまったくと言ってよほど注記を欠く」³⁷⁾伊能大図において、当時の吉田で一般的に通用していたとも考えにくい「水中洲」という名称が特別に付されたのか、という点である。以下の項ではその理由を検討したい。

(3) 水中洲が描かれた要因①：地物自体の価値の高さ

伊能は測量中毎日欠かさず『測量日記』を記したが、日記の中に水中洲に関する記述はない。水中洲の実測もしていないので測量記録もない。測量時の鹿絵図(景観スケッチ)には水中洲の姿が描かれているだろうが、鹿絵図の多くは現状未整備である。よって水中洲が描かれた理由は周囲の状況から推測するよりないが、少なくとも実際に描かれた以上は、水中洲が伊能らにとり「描くに足りる地物」と認識されたことは間違いない。

そして水中洲が描かれた理由は、まずその地物自体の価値の高さによるものであろう。干潟自体は当時各地に分布していたが、三河湾奥に広がる干潟は全国的にみても屈指の規模であったと考えられ、その中でも全長8kmに及ぶ水中洲は特別の威容を持って伊能らの注目を得たに違いない。また、伊能測量隊に取り干潟は海岸線から展望するしかなく、一般に全容を把握することが難しい対象だが、水中洲に限れば西端(先端)に程近い田原側から、水中洲と並行しつつ田原湾岸を通り、水中洲の根本(東端)にあたる牟呂に至る測量ルートを進める(第5図)ため、三方から水中洲を眺めることができ、他の干潟に比べて全容の把握が容易であった。これも水中洲が描かれた要因としてあげられよう。

(4) 水中洲が描かれた要因②：伊能測量の方向性の揺れ

要因の第二としては、伊能測量隊の干潟に対する扱いの方向性が、吉田を含む太平洋沿岸の測量時に定まっていなかったことが考えられる。伊能らの全国測量は第1次測量から第10次測量に及ぶが、このうち第1次測量(1800年)は半ば伊能忠敬の私的事業として始められたもので、目的も地球の緯度1度の長さを実測により確かめることと蝦夷地の初めての詳細な地図を作成することであ

た。また、この時は三河湾の六条瀨に匹敵するような干潟のある地域を通ってはおらず、必然的に地図に干潟が描かれることもなかった。

第1次測量の成功を受けて企画された第2次測量（1801年）は、江戸から伊豆半島を周り、そこから内陸を青森まで北上して東北から関東地方の太平洋沿岸を測量して江戸に帰着する行程を辿った。この時は広大な干潟の広がる江戸湾（東京湾）を通っているが、江戸湾の干潟は描かれていない（第4図）。江戸湾の干潟が描画されなかった理由は判然としないが、測量にあたっての幕府の命令があくまで海岸線の測量であったこと、緯度1度の実測が忠敬自身の主目的であったことが大きな要因といえよう。

この第1次・第2次測量の成功を受けて、幕府の伊能らへの待遇は大きく向上する。東日本全域の海岸測量を企画した第3次・第4次測量（行程上2回に分けられているが企画としては一体のものである）では、測量先各所に「幕命による測量」である旨が通知され、測量費用もそれまで2、3割であった幕府補助がほぼ100%補助になる³⁸⁾。すなわち、第2次測量までとは測量事業の性質が大きく変わっている。

第3次測量（1802年）で通った海岸線は新潟の直江津から青森に至る日本海沿岸に限られ、沿岸に大きな干潟はないことから、ここでも干潟が描画されることはなかった。しかし、第4次測量（1803年）においては、三河湾において広大な干潟に直面することになる。また、第4次測量では伊勢湾岸も測量しているが、知多半島を回ったのち熱田（現在の名古屋市熱田区）から内陸を移動しているので、木曾三川河口付近など伊勢湾岸に広がる干潟の主要部は実見していない。このように、三河湾奥の干潟は、伊能測量隊が幕府事業としての全国測量を本格的に意識してから初めて出会う広大な干潟であり、その取扱いが改めて議論になったことが考えられる。

どのような議論が伊能らの間でなされたかは史料がなく推測するしかないが、ともかく結果的に第2次測量までの方針を曲げて三河湾奥には干潟が描画されることになり、文化元年版の伊能図として將軍家斉の上覧に供することになった（1804年9月6日³⁹⁾。東日本全域の実測地図の完成を受けて、伊能らの測量事業は日本全国の実測地図を作成するという幕府の直轄事業となり、第5次測量以降の伊能測量は更に性格を新たにす。第5次測量（1805～6年）では伊勢湾西岸部から紀伊半島、中国地方全域の海岸線測量が行なわれた。第5次測量のルー

トには伊勢湾、大阪湾、兎島湾等大規模な干潟が広がる地域が含まれているが、これ以降の測量を含めてほとんど干潟が描画されることはなかった。あまりの干潟の多さに閉口して描画を断念したのか、単に第2次測量までの方針に戻ったのか、他の理由があるのかはわからないが、結果的に三河湾奥の干潟は伊能図中ほぼ唯一完全な形で描画された干潟となった。これは伊能図全体としてみればバランスを欠いているが、一度将軍の上覧に供した地図の内容を描きかえ、水中洲を後から抹消することはできなかったのだろう。

(5) 水中洲が描かれた要因③：吉田藩主松平信明の存在

水中洲が伊能図中ほぼ唯一描かれた干潟となったことの決定的な理由は判然としないものの、伊能らが水中洲を「特別扱い」していることは明らかであり、その背景に水中洲の位置する吉田藩の藩主、松平伊豆守信明（1763～1817年）の存在を意識していなかったと考えることは難しい。松平信明は「知恵伊豆」と呼ばれた大河内松平伊豆守信綱の子孫にあたり、伊能測量（1800～1816年）のほぼすべての時期において、幕府の老中首座の地位にあった（信明の老中在職は1788～1803年と1806～1817年）。第5次以降の伊能測量は幕府の直轄事業なので、信明はその最高責任者にあたる。また、信明は蝦夷地対応の責任者として活躍していた⁴⁰⁾ため、第1次測量の段階から伊能の測量事業に何らかのかかわりを持っていたと考えられる。

命令系統上幕閣の最高責任者である老中首座自身が伊能忠敬や高橋至時に直接指示を出すことはなかったが、少なくとも信明の確認・了解なしで伊能の蝦夷地測量が開始されるのは困難であったろう。渡辺は、信明を若年寄堀田正敦（1755～1832年）とともに「測量を推進した中心人物」と評している⁴¹⁾。

伊能が没した時、小宮山楓軒（1764～1840年）は、伊能忠敬の友人久保木清淵の語ることとして、『懷室日札』に次のように記している。

勘ヶ由〔忠敬の隠居名〕五七歳申ノ年 蝦夷地測量ノ事命セラレ 往来略筋ヲ測量シテ上ツリシニ 松平伊豆守〔信明〕コレヲ見テ 迎モノ事ニ関東ヲ測量センコト可カナリトマウサレニ起コシトナリ 始八十年ニシテ功ヲ終ルツモリナリシカ十数年ヲ経タリシトナリ⁴²⁾

すなわち、伊能らの第1次測量の成果図を見た信明が「これなら関東全域の地図も作れるだろうか」と言ったことが伊能らの全国測量につながったという証言である。これはあくまで伝聞であり、実際に信明が伊能測量にどの程度かかわっていたかはわからない。しかしながら、伊能の生前にこのような言説が広く知られており、それに異を唱えられることもなかったことは事実であろう。そして伊能らも当然これらの言説は承知していたはずである。少なくとも、吉田藩主信明は伊能測量隊の生殺与奪権を持つ人間であり、絶対に不興を買ってはならない相手である。となれば、吉田藩領の測量と成果図の作成には細心の注意が必要であった。

今日、東京国立博物館には伊能中図一式が収蔵されており、国の重要文化財に指定されている。これは、もともと信明の子孫にあたる吉田藩大河内松平家に伝来したものである。最終版伊能図の完成は信明も忠敬も没した後のことで、この伊能中図が吉田藩に渡されたときは藩も息子の信順（1793～1844年）に代替わりしていた。しかしながら、本図の美術品としての美しさは他の現存伊能図に卓越しており、特別の配慮を持って作成・献呈されたものと考えられる。渡辺は、この美しい伊能中図が吉田藩松平家に伝来したことについて「大スポンサーへの献呈図と考えれば納得がゆく」⁴³⁾と述べている。伊能らが信明の没後においても格別な配慮と感謝を吉田藩に対して行っていたことは間違いなく、信明の権勢時には猶更のことであつたらう。

また、伊能は三河湾の測量を終えた後、熱田にて師で上役の高橋至時に次のような手紙⁴⁴⁾を出している（1802年5月7日付）。

一筆啓上仕候（中略）尾州御領分測量勞心仕候所尾州より兼て御領内に御触有之猶又此度測量先へ御役人浦々御回御差図も有之候よし依之一切差支は無之実に御威光難有奉存候外駿遠三の国々は御領主より海辺に夫々掛役人差出し被下候

一吉田城下著の後小野田三郎右衛門御代官赤坂御役所幸便に書状差出し申候屈御高覧被下候儀と奉存候其後吉田城下四月十四日出立（以下略）

前段では大藩である尾張藩での測量遂行が不安であったが、よく準備をしてもらって待遇もよかったこと、駿河・遠江・三河の諸大名領でも同様だったことを報告し、「実に〔幕府の〕御威光が有難い」と謝意を示している。この手紙は師

とはいえ幕府の公職者宛に出しているので幕閣を持ち上げるのは当然ではあるが、幕府の御威光が有難いというのは、これまでの私的測量の難渋を経験した忠敬の本心から出た感慨だろう。一民間人の測量に対する諸藩の厚遇は、勘定奉行所から出された測量の先触れが十分に機能していた結果であり、そのことを実感するほど幕府勘定所（伊能測量の予算もここから出ていた）を統括する老中、中でも首座たる松平信明への畏怖と尊敬の念は大きくなったものと考えられる。

また、手紙の前段では駿遠三河の諸藩で海岸の測量現場への役人の派遣があったことがわかる⁴⁵⁾。測量日記に詳細は書かれていないが、仮に吉田藩の役人が水中洲周辺を測量中の伊能隊に接触し、水中洲のことを説明したことがあったならば、その意見を測量に取り込まざるをえなかっただろう。

なお、手紙の後段では、伊能が吉田逗留中に測量の進捗について報告した手紙が別に出されていたことがわかる（『測量日記』にも記されている）。残念なことに筆者はその手紙の内容を把握できていないが、前後に出された手紙が今日伝来していることから、どこかに残されていたり記録されていたりするかもしれない。もし確認ができれば、水中洲や吉田藩領での測量の様子、後述する斎藤父子に関する諸々の情報が引き出せるかもしれない。読者諸賢のご助力を請いたい。

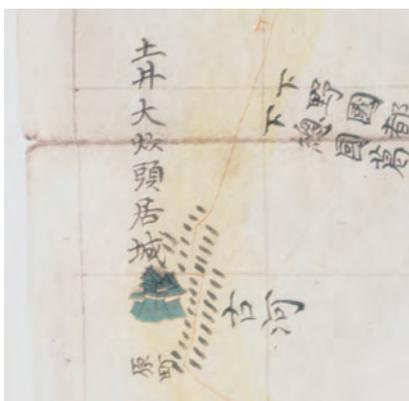
それはともかく、このような吉田藩主信明の役割の大きさを伊能らが意識すればするほど、水中洲を地図上に描画するか否かを迷ったとき、「描かない」という選択肢は取りようがなかったのであろう。描くことで不興を買うことはまずないだろうが、描かないことで不興を買う可能性は考えられたからである。

むしろ、水中洲の特例というべき表現には、伊能らが松平信明の歓心を引こうと積極的に配慮した節も見受けられる。伊能は元々世事に長けた老練な商人である。第4次測量の終了後、一旦成果を地図にまとめて幕閣に提出し、将軍の上覧を仰ぐ計画があることを、三河湾を測量中の伊能は既に知っていたであろう。そして、上覧に成功すれば幕臣に取り立てられる可能性があることも承知していたはずである。隠居の身とはいえ、人並みの名誉欲の持ち主⁴⁶⁾で、最晩年まで伊能家の繁栄と自身の功業成就を希求した忠敬である。将軍の上覧は学者として最高の栄誉であり、武士身分への登用は伊能家の悲願であるならば、その実現・成功に向けて万全の配慮をしたと考えるのが自然であろう。——測量の成果を将軍の上覧に供する時には、将軍とともに老中たち、もちろん首座の信明も同席するだろう。もともと伊能測量と地図に高い関心を持つ信明ならば、並べられた地図を

熱心に見入るはず。そしていつの時代もそうであるように、地図を眺める人間は自分の郷里を地図上に探す。信明も初めて精密な測量地図に描かれた吉田藩領の姿を興味深く眺めるに違いない。そして、水中洲に気付いた時、何と述べるだろうか。あるいは傍らにいる将軍家斉や老中連に吉田藩と三河湾に広がる肥沃で広大な干潟について嬉々として語るかもしれない。——商人として相手を喜ばせる術を心得た伊能が、このように考えたとしても不思議ではない。

もちろん、これは確固たる史料の裏付けを持たない筆者の憶測の域を出ない。しかし将軍上覧という一世一代の晴れ舞台が眼前あるなら、それに向けて最高の舞台設定をするよう努力するのは、商人として、幕府天文方高橋至時への恩返しとして当然の行動であり、伊能はそれが可能な人物であったことはまちがいない。

実際に、現存する伊能大図からは、他にも老中に配慮したと考えられる形跡を確認できる。老中土井大炊頭利厚（1759～1822年／老中在職は1802～1822年）の居城である古河城（現在の茨城県古河市）は、伊能大図では第87号の図幅に含まれる位置に立地しているが、それに加えて隣の第88号の図幅にも古河城と思しき城郭の描画が確認できる⁴⁷⁾（第9図）。古河城は確かに図幅の境界部に位置しているが、分割地図である伊能図の性質上複数の図幅に重複して描く必要はなく、実際に大和郡山城（郡山藩柳沢氏の居城）や讃岐丸亀城（丸亀藩京極氏の居城）のように図幅の境界部に位置している他藩の城郭は複数の図幅をまた



伊能大図第87号の古河城



伊能大図第88号の古河城

第9図 伊能大図の2図幅に描画された古河城

・国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」より作成。

いではない。大和郡山城などは、譜代大名最大級の15万石を領する雄藩の居城にもかかわらず、城郭は大図第134号の図幅に、城主名は第135号の図幅に分割して描かれるという手心なき扱いを受けている⁴⁸⁾。大和郡山城と古河城の扱いの格差を鑑みると、その背景に伊能らの老中土井利厚への格別の配慮を感じることは難しくない⁴⁹⁾。

結果的に松平信明は第4次測量の終了後間もなく老中を辞し（1803年）、翌年の文化元年版伊能大図の將軍上覧に同席することはなかった。しかし、結果的に水中洲は伊能大図に描かれることによって永遠にその姿を留め、上覧に成功した忠敬も首尾よく幕臣に取り立てられることになった。

(6) 水中洲が描かれた要因④：現地知識人齋藤一握父子の存在

現在の測量隊や調査隊と同様に、伊能忠敬は測量にあたって現地の知識人を大いに尊重し⁵⁰⁾、彼らの地理的知識を測量事業や地図作成に活用した⁵¹⁾。実際に、伊能らと交流した全国の知識人層が残した記録が各地に残されており、今日伊能測量の実態と地域社会の対応を知るうえで貴重な情報となっている⁵²⁾。吉田においても、伊能と交流のあった知識人が存在しており、彼らの与えた地理的知識が、水中洲をはじめとする伊能図の吉田周辺地域の描画に関与している可能性が指摘される。

当時、吉田城下船町（現在の豊橋市船町）に齋藤一握（1743～1804年）という算学者がいた⁵³⁾。一握は号で、名は九郎左衛門信芳、隠居後は東作を名乗った。吉田の裕福な家に生まれた一握は青年期から浜松や京都等を遊学して学業を修め、和算のほか天文学や易学にも長じたとされる。その門人帳には、葦山代官江川英毅（1770～1834年）や吉田藩江戸家老関屋弥一右衛門以下各地に和算の弟子66名、天文学の弟子19名、易学の弟子15名を持っていたと記録されている⁵⁴⁾。当時の測量には算術と天文学が必須であった（伊能も両者を修めている）ことから、一握自身測量の知識も高かったものと思われる。

齋藤一握は、すでに第2次測量中の伊能測量隊と三島（現在の静岡県三島市）で接触していた。1801年（享和元年）5月30日の『伊能測量日記』には、次のように二人の出会いが記録されている。

同晦日（中略）八ツ頃三島宿に着（中略）五月六日、高橋先生より御出し被

成候。量程車、兼て三島宿に届有之候を請取。七ツ後に葦山御代官所より当所へ出役御手代山田佐四郎見舞に来る。夜に入、又山田佐四郎、吉田船町齋藤九郎左衛門、当時は東作というよし、つれ来る。此齋藤氏は算術者にて、授時曆をも知り、葦山御代官へ算術、曆術共に御指南も致候よし。所持の測器為見、当時の測量曆談に及候所、感心の様に相見る⁵⁵⁾

住所氏名、弟子に葦山代官等の情報から、『測量日記』に記された齋藤東作は九郎左衛門一握で間違いない。忠敬の伊豆半島測量を、当地を所轄する葦山代官所が代官の師である一握に伝え、来訪が実現したものと思われる。すでに老境に達し学問的にも一家を構えた身でありながら自ら赴くフットワークに、一握の遊学経験の確かさと探究心の高さを感じることができる。

川崎は両者の出会いについて「忠敬との出会いはこの人物〔筆写注：一握〕にどんな影響をもたらし、そののちどのような人生を送ったのであろうか」⁵⁶⁾といささか伊能びいきの視点で述べているが、当時の伊能は、蝦夷地測量という大業を果たしたとはいえ高橋至時の一弟子として内弟子数人を持つ身に過ぎず、年長で葦山代官以下門弟百人を抱える一握は格上の相手である（忠敬は後に葦山代官江川英毅の和算の師になっている⁵⁷⁾。あるいは一握の後任として扱われていたのかもしれない）。その一握が老齢を押して自身の宿所を問い、伊能の測量機器や話に「感心」して「曆・測量談義」を対等の立場で行ったことは、伊能にとっても自信を新たにする経験になったのではなかったらうか。実際に、間宮林蔵との最初の出会いすら一言も書かれない測量日記⁵⁸⁾に、測量中の知識人との交流がここまで詳細に書かれていることは珍しい。それだけ伊能にとっても印象に残る出来事だったのだろう。

そして、最初の出会いから2年後、第4次測量中の吉田において一握と伊能は再会している。この間の測量日記を見てみよう。

同〔四月〕十日 朝より晴（中略）牟呂村・我等は九ツ後に着（中略）此夜晴天測量（吉田船町役人、齋藤九郎右衛門見舞に来る。）

同十一日 晴天。六ツ半前牟呂村出立（中略）午前吉田城下（松平伊豆守居城）船町へ着。止宿（浄土宗橋本山龍運寺、橋際にて郭外なり。船町役人九郎右衛門なり。）、城下迄は渥美郡なり。（吉田城下は町数二十四町。家数千六七百軒

もあるよし。逗留中、名主九郎左衛門亭主分之) 三谷村迄泊触を出。(中略)

同十二日 朝より雨天逗留。八ツ後より雨止、夜亦曇る。

同十三日 朝より曇天逗留。終日曇る。午中雲中に太陽を測。夜曇る。逗留。三日地図を仕立。

同十四日 六ツ頃小雨 直に止。五ツ前吉田船町出立。乗船 前芝村印杭至る。(以下略)⁵⁹⁾

1803年(享和3年)4月10日は水中洲を眺めつつ田原から豊橋沿岸の測量を行い、水中洲の根元にあたる牟呂村(現在の豊橋市牟呂町)に宿泊した日だが、夜に船町役人齋藤九郎右衛門が宿舎に來訪している。この齋藤九郎右衛門は、一握の高弟で養子(娘婿)に入って後継者となった齋藤九郎右衛門元章で間違いはない。元章は1802年(享和2年)正月から吉田船町の庄屋(町役人)を務め、自身も一流の学者で「算術ハ子和〔一握の字〕ヨリ増リシ」と評されていたと記録にある⁶⁰⁾。

伊能測量隊の來訪にあたって現地の役人が挨拶に訪れるのは珍しくないが、この時の元章の來訪には明確な目的(おそらく志願しての來訪)があったと考えられる。すなわち、自身が一握の子であることを名乗り、翌日の宿泊地が吉田船町の龍運寺(現在も豊橋市船町に健在である)であること、養父一握が再会を心待ちにしていることを伝えることである。

翌日の宿舎が龍運寺になったことも、船町役人齋藤元章の差配によるものである可能性は高い。もともとの計画では吉田城下に宿泊する予定であった伊能測量隊が、城下の範囲に含まれるとはいえ「郭外」に位置する船町龍運寺に宿泊しなければならない積極的な理由はない。城下には伊能測量隊を泊められる施設は他にいくらでもあっただろう。また、龍運寺は一握と縁の深い施設であり、伊能測量隊來訪の翌年(1804年)に一握が没したとき、門弟たちは龍運寺境内の観音堂の前に一握の碑を建てたと記録されている⁶¹⁾。ならば龍運寺が選ばれた理由は明白であろう。養父と旧知の関係にある伊能測量隊が吉田に來訪すると知った元章は、吉田船町の役人という立場を最大限活用し、準備万端で伊能らを待ち構えていたということである。

伊能測量隊は都合三日吉田船町龍運寺に滞在しているが、測量日記からは連日元章(齋藤九郎右衛門)と一握(齋藤九郎左衛門)の來訪があったことが伺える。

当然単なるご機嫌伺で済むはずはなく、周辺の地理や政情、測量や天文に関する議論が行われ、伊能測量隊とは貪欲に知識を交換したことだろう。測量日記には吉田城下の人口等が詳細に記されているが、これも斎藤父子から伊能が得た情報の一端であろう。当然、斎藤父子からは水中洲をはじめとする当地の地理情報も大量に与えられたに違いない。そして、4月13日（おそらく12日も）は終日地図の仕立てを行っているが、これにも斎藤父子が立ち会ったことは想像に難くない。

水中洲が伊能大図に描画されたことに、斎藤父子がどの程度影響を及ぼしていたのかはわからない。しかしながら、三河湾の状況に精通した船町の住民にして一流の知識人であった斎藤父子が水中洲をはじめとする当地の地理情報を積極的に提供したこと、彼らの意見を伊能らが最大限尊重したことは経緯からして確かであろう。また政治的にも一握は吉田藩江戸家老をはじめ藩内に多数の弟子を抱え、元章は現役の役人であった。仮に両者の機嫌を損ね藩内に伊能測量隊の悪評が流れでもしたら、それは即座に藩主老中首座松平信明の耳に入り、測量隊の破滅に直結する。仮に斎藤父子から「水中洲は描いた方がよい」という見解が出されたとすれば、それを拒絶する選択肢は伊能らにはなかっただろう。

斎藤父子に限らず、伊能測量隊の来訪に対する吉田藩内の対応について記した史料は整理されていない。斎藤家は元章の孫の代に零落し、家にあった史料類も散逸したとされている⁶²⁾が、吉田藩関係の史料を含めどこかに関連史料が残されている可能性はあり、それらを検討することができれば吉田における伊能らの具体的な活動や水中洲が描かれた理由に迫ることが可能になる。今後の研究の進展が望まれる。

ここまで、伊能大図「吉田」に水中洲が描かれた要因を種々検討してきたが、史料的な制約からこれらはいくまで憶測の域を出ない。しかしながら、水中洲が極めて異例な描かれ方をしていること、水中洲が老中首座松平信明の領地であり伊能忠敬旧知の斎藤一握の故地である豊橋に立地していることは、偶然とは考えにくい事実の一致として指摘しておきたい。

2. 立岩

(1) 立岩の描画が特異である理由

立岩は、現在の豊橋市雲谷町に存在するチャート質の巨岩（岩山）である（第10図）。頂上部の標高は88.7m、岩壁の高さは約25mある⁶³⁾。今日では岩登り

の対象として著名である。

伊能測量隊は第5次測量中の1805年（文化2年）3月29日、立岩付近の東海道を測量し、その後も測量活動の往路・帰路で複数回立岩付近を通過している。第10図にあるように、今日アメリカ議会図書館に残る伊能大図「吉田」には、立岩が単独の岩として地名を付されて絵画的（写實的）に描画されている。しかしながら、伊能大図において、立岩のように単独の岩が描画される例は極めて珍しい。

伊能大図に描かれた地名を網羅した『デジタル伊能図』⁶⁴⁾によれば、伊能大図中



立岩周辺の地理院地図

東海道新幹線から展望した立岩 (Mapillary より転載)

第10図 伊能大図に描画された内陸の岩

・国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」等より作成。

「岩」で終わる地名は全国に142件ある。このうち9割以上の128件は「海岸の岩礁や海面上の岩」に付されたものである。海岸の岩礁を詳細に記すのは、沿海輿地図という伊能図の性質から当然であろう。また5件は集落等につけられた地名であり、地物としての岩を指すものではない。内陸の地物において「岩」で終わる地名は伊能大図中9件あるが、うち7件は他の山地と同様になだらかな山の形で描画されており、地物としての岩を思わせるような写実的描画はなされていない。内陸の地物に対して、単独の岩を思わせる描画がなされているのは、大図第151号の「廻り岩」（岡山県総社市）と立岩の2件のみである（第10図）。このうち、廻り岩は測量線の終点となっており、測量対象となったために特別岩の形に描画がなされたものと考えられるが、立岩は測量線である東海道からほぼ1km離れた位置にあるにも関わらず独立して描画されている。描画された姿も、立岩の方が詳細で大きい。すなわち立岩は、全伊能大図中、内陸に立地しており測量と特別関係ない地物であるにも関わらず単独で描画され地名も付されている唯一の岩（岩山）となっている。

（2）立岩が描かれた要因①：地物自体の価値の高さ

立岩に関する記述は伊能の『測量日記』等にはなく、特別に描かれた直接の理由は不明である。しかしながら、立岩が特別の扱いを受けている理由としては、水中洲と同様の要因を考えることができる。第一に、立岩の地物としての価値の高さと知名度である。立岩は見事な一枚岩であり、東海道からは約1km先に展望できるにすぎない（第10図）が、ここを通った旅人たちの道中記にも多く取り上げられる⁶⁵⁾名物的存在であった。測量事業中東海道を何度も往来した伊能測量隊が注目しても不思議ではない。

しかしながら、全国各地の名勝奇岩を実見している伊能測量隊が、立岩のみを特別取り上げなければならないほどの珍しさが、立岩にあるとまではいえない。立岩に匹敵するかそれ以上の規模の奇岩・巨岩は全国を探せば他にもあり、特に伊能測量隊が通った海岸沿いには多数存在するが、例えば和歌山の「橋杭岩」や宮崎の「鬼の洗濯板」に特別な絵画的表現がなされているわけではない。立岩の地物としての価値の高さは、立岩が描かれた理由としては十分だが、伊能大図において全国で立岩のみが特別絵画的に描かれたことを説明する理由としては不十分だといえよう。

(3) 立岩が描かれた要因②：吉田藩主松平信明の存在

立岩が特別に描画された要因としては、やはり吉田藩主松平信明の存在を伊能らが意識していたことを考えざるをえない。信明は第5次測量に先立つ1803年(享和3年)に老中を辞していたが、伊能らが第5次測量に出立した時点まで江戸に滞在し続けており、幕閣に隠然たる影響力を及ぼしていた。実際、第5次測量中の1806年(文化3年)には老中首座に復帰し、1817年(文化14年)に没するまでその地位を保っている。伊能測量隊としても吉田藩領の再度の測量において、第4次測量時と同等以上の配慮をする必要があっただろう。

伊能が幕臣に取り立てられ測量事業が幕府直轄事業に格上げされたのは信明の影響力によるところが大きい。想像をたくましくすれば、伊能にとれば大恩を受けた存在でありながら老中を退き文化元年版伊能大図の將軍上覧という成果公開の舞台に立ち会えなかった信明に対して、せめてもの礼として立岩を書き加えたと考えることもできるだろう。

(4) 立岩が描かれた要因③：現地の知識人齋藤一握父子の存在

立岩の描画に対して、齋藤父子の関与も、第4次測量時同様に想定することができる。すでに前年(1804年)に一握は他界していたが、養子の元章は船町役人として健在である。立岩周辺の東海道の測量を行った1805年(文化2年)3月29日の伊能測量日記には次のようにある。

同〔三月〕二十九日 曇天。朝六ツ後新居宿出立。先手は市野・坂部・平山、白須賀宿より吉田城下船町迄測る。後手は我等・高橋・稲生、新居宿から白須賀宿迄測る。(中略) 仍て後手九ツ半頃に着。先手は八ツ後に着。吉田城下、立花左近将監、四月朔日泊に付同宿の内、船町浄土宗橋本山竜雲寺に止宿。前年亥にも止宿せし所なり。着後当町奉行倉掛源左衛門、安松金右衛門、石川作右衛門、秦千右衛門、右同心小頭内藤源蔵、町奉行惣代使に来る。船町名主齋藤九郎左衛門。(中略)

四月朔日 大雨逗留 午前雨止 午後より天気成。夜晴天測量。

同二日 朝晴 六ツ後吉田船町出立。(以下略)⁶⁶⁾

幕府直轄事業として規模が拡大された伊能隊は、測量部隊を二手に分けて東海道

白須賀宿（現在の静岡県湖西市） - 二川宿（現在の豊橋市）間と二川 - 吉田間をそれぞれ測量した。立岩の展望できる白須賀 - 二川間の測量は伊能隊の分掌ではないが、当然忠敬らもその姿を眺望し、測量成果を吉田の宿舎で突合せ検討しただろう。

この日の宿舎の選定にあたっては、たまたま柳川藩（現在の福岡県柳川市）立花左近将監の参勤交代行列が吉田城下に宿泊するというで慌ただしかったため、急遽第4次測量時の宿舎とした船町の龍運寺に泊まったと記されている。これは船町役人の斎藤九郎右衛門藤元章（測量日記には「斎藤九郎左衛門」とあるが役職からして元章で間違いない）が宿舎の手配を行ったと考えていいだろう。

吉田宿の混乱を見て伊能側が急遽元章を頼ったのか、吉田宿の状況を見た元章が予め機転を利かせて（あるいは始めから測量隊を龍運寺に泊めるつもりで口実にて）先に宿舎を手配したのかはわからないが、伊能らが元章に対して大きな信頼を寄せていたことは間違いない。そして斎藤父子の庭というべき龍運寺を宿舎（この時も雨天のため2連泊している）にした以上は、元章が来訪して旧交を温めつつ測量事業について問わないはずはない。吉田藩内の測量成果、立岩についても話題にあがっただろう。仮に元章が立岩について強く推したならば、伊能もそれを採用するに異論はなかったはずである。

3. 消された城主名

(1) 原本で書かれなかったのか模写時に消されたのか

ここまで、水中洲と立岩の特異な描写がなされた背景には、両者が老中首座松平信明を藩主とする吉田藩領に立地していることへの伊能側の配慮が想定されることを指摘してきたが、それならばアメリカ議会図書館所蔵版伊能大図第116号「吉田」において、吉田城に肝心の城主名が記されていない（第3図）のは奇異なことである。仮にこの状態の伊能大図が完成版として出されたのなら、吉田藩主（老中首座松平信明は伊能図完成時には他界していたが、後を継いだ信順も後に老中職を務め伊能図を閲覧できる立場にあった）が見れば激怒するのは必定で、伊能らにとっても身の破滅に直結しかねないことである。さらに、伊能忠敬記念館に残る文化元年版の伊能大図「吉田」（第2図）には吉田城に「松平伊豆守居城」と城主名が記されている。文化元年版から最終版の提出までに代替わりがあったとはいえ、吉田藩主大河内松平家は代々松平伊豆守を名乗っているため、最終版

でわざわざ城主名を抹消する理由はない。

また、1909年に発行された『歴史地理』13-1には、伊能らの実作による最終版伊能大図（伊能家伝来の副本）第155号の写真が掲載されている⁶⁷⁾。焼失前の伊能大図の原本の姿を直接伝える現在唯一の資料であるが、これとアメリカ議会図書館所蔵版伊能大図第155号を比較すると、海岸線や地名は正確に書き写されているにも関わらず、松江城（現在の島根県松江市）の城主名（松平出羽守居城）のみがアメリカ議会図書館版では欠落しており、模写にあたって原本にあった城主名が写されなかったことになる⁶⁸⁾。また、太田原城（現在の栃木県太田原市）や松本城（現在の長野県松本市）は、アメリカ議会図書館版の伊能大図には城主名が記されていないが、同様の原本から模写したと考えられる国立国会図書館所蔵の伊能大図にはそれぞれ城主名が記されている。これらの例からみて、アメリカ議会図書館版の伊能大図「吉田」で吉田城の城主名が欠落している理由は、原本には書かれていた城主名が、明治期の模写で欠落したからとみなせる。

（2）明治の模写で城主名が消されたのはなぜか

吉田城や松江城の他にも、アメリカ議会図書館所蔵版の伊能大図全207図幅では、城主名が欠落した城郭が少なくないことが知られている。この理由は現在のところ解明されていない⁶⁹⁾が、吉田城にせよ松江城にせよ全国的に著名な城郭で藩主の家格も高く、単に模写にあたって書き忘れただけでも思えない。現に「吉田」の図幅でもより規模の小さな西尾城と田原城には城主名が記されており（第3図）、吉田城のみ欠落していることには何らかの意図が感じられる。そこで、アメリカ議会図書館所蔵版伊能大図において城郭が描かれながら城主名が記されていない他の例を見ながら、吉田城に城主名が書かれなかった理由を考えてみたい。

アメリカ議会図書館所蔵版伊能大図に描かれた城郭は119件⁷⁰⁾で、うち95件には城主または領主名（支城である秋田藩領大館城、仙台藩領白石城、熊本藩領八代城、幕府直轄地である甲府城の4件を含む）が、6件には城主名ではなく城郭名が記されている（第1表）。城主名・城郭名ともに記されていないのは吉田城を含む18件である（第2表）。ただし、このうち大坂城（幕府直轄）と米子城（鳥取藩の支城）はもともと城主が不在であるので、明白に城主がいながら記されていない城郭は16城となる。

第2表にあるように、城主名が記されなかった16城は、彦根藩や松江藩、広

第1表 アメリカ議会図書館所蔵版伊能大図掲載の城郭名が付せられた城郭

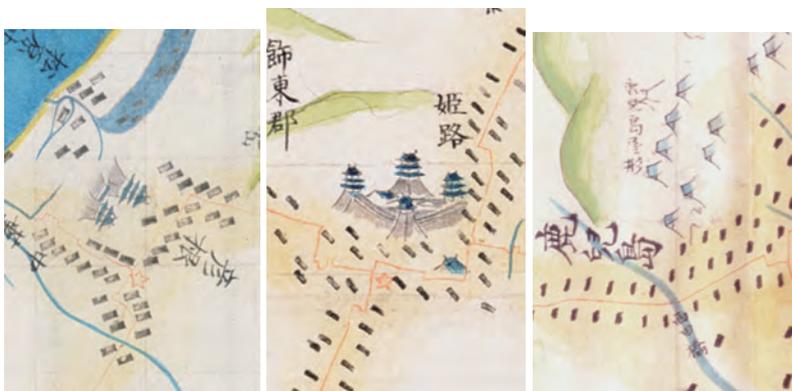
藩名	石高等	表記	測量当時の城主	他の伝来伊能図での城主名表記等
松本藩	譜代6万石	松本城	松平(戸田)光年	国会図書館蔵伊能大図には「松平丹波守居城」
鳥取藩	外様32万5千石	鳥取城	松平(池田)斉稷	学習院大学蔵伊能中図には「松平相模守居城」
美作勝山藩	譜代2万3千石	勝山城	三浦毗次	
白杵藩	外様5万石	白杵城	稲葉雍通	『九州沿海図』には「稲葉伊代守居城」
人吉藩	外様2万2千石	人吉城	相良頼徳	
薩摩藩	外様77万石	鹿児島館	松平(島津)斉興	『九州沿海図』には「松平豊後守居城」

・国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」より作成。

第2表 アメリカ議会図書館所蔵版伊能大図掲載の城主名・城郭名がない城郭

城郭名	石高等	測量時の城主	他の伝来伊能図での城主名表記等	備考
太田原城	外様1万1千石	大田原庸清	国会図書館蔵大図には「太田原飛騨守居城」	
松代城	譜代10万石	真田幸専	国会図書館蔵大図には「真田弾正大弼」	老中輩出
吉田城	譜代7万石	松平信明		老中首座輩出
彦根城	譜代30万石	井伊直亮		大老輩出
大阪城	-	-		幕府直轄地
姫路城	譜代15万石	酒井忠実		大老輩出
出石城	外様3万石	仙石政美		
松江城	親藩18万6千石	松平齐恒	伊能大図副本には「松平出羽守居城」	
米子城	-	-		鳥取藩支城
広島城	外様42万6千石	浅野齐賢		
丸亀城	外様5万1千石	京極高朗		
西条城	紀州藩支藩3万石	松平頼啓		
松山城	親藩15万石	松平定通		老中輩出
佐伯城	外様2万石	毛利高翰	『九州沿海図』には「毛利美濃守居城」	
唐津城	譜代6万石	水野忠邦		老中首座輩出
平戸城	外様5万2千石	松浦熙	京大図書館蔵大図には「松浦肥前守居城」	
島原城	譜代6万5千石	松平忠馮		徳川慶喜実弟が藩主
延岡城	譜代7万石	内藤政順	『九州沿海図』には「内藤亀之進居城」	

・国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」より作成。



彦根城

姫路城

鹿児島城（鹿児島屋形）

第11図 伊能大図に城主名が記載されていない城郭の例

・国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」より作成。

島藩のような大大名から小大名まで、親藩・譜代・外様の区別なく存在し、全体を説明するような共通性をこれらから引き出すことは困難である。おそらく城主名が欠落した理由は様々で、中には単にうっかり書き忘れたというものもあるのだろう。しかし、これらの中には一定の共通性のある城郭を抽出することも難しくない。それは、本来なら城主名が書かれなければおかしい江戸幕府の最高幹部の居城が多数含まれているという点である。

まず、彦根城（現在の滋賀県彦根市）の城主名が欠落していることが特筆される（第11図）。彦根城の城主は譜代筆頭井伊掃部頭である。明治期の模写にあたった人間が、幕末に名を轟かせた大老井伊掃部頭直弼（1815～1860年）と彦根藩を知らなかったわけではなく、この欠落は意図的なものであろう。

また、姫路城（現在の兵庫県姫路市）の城主酒井雅楽頭も名が欠落している。酒井雅楽頭家も、井伊家と同じく譜代大名最上級の家格（大老家）であり、幕末の酒井忠績（1827～1895年）は江戸幕府最後の大老を務めている。姫路城が属する図幅である伊能大図第141号には、「池田采女陣屋」や「松平久五郎在所」という酒井家より相当家格の下がる旗本クラスの陣屋にまで領主名が書かれているにも関わらず、図幅の中心というべき姫路城のみ城主名が欠落しており、ここに「姫路城の城主名を書かない」という模写側の強い意志を感じることは難しく

ない。少なくとも、伊能図の模写を担当する立場にあった明治初期の人間にとり、彦根城の城主が井伊掃部頭、姫路城の城主が酒井雅楽頭であるという程度の知識は調べなくてもわかる「常識」であったわけで、これらの欠落を単純に書き写し忘れた結果とは考えられない。

また、天保の改革を主導した老中首座水野忠邦（1794～1851年）の居城唐津城（幕末の唐津藩主小笠原長行も老中職を務めている）や、同じく天保の改革に関わった老中真田幸貫（1791～1852年）の松代城（現在の長野県長野市）、第一次長州征伐の先鋒を務め幕末に老中を輩出した伊予松山藩松山城（現在の愛媛県松山市）、將軍慶喜の実弟（松平忠和）が最後の藩主となった島原藩島原城（現在の長崎県島原市）も城主名が欠落していることも見逃せない。

こうなれば、井伊家などと並ぶ譜代の名門で、江戸後期に信明・信順の二代にわたって老中を輩出した大河内松平伊豆守家の居城吉田城も、彦根城や姫路城と同様の理由で城主名が抹消されたものと考えてのが自然であろう。その理由が、明治政府にとって否定すべき相手である幕府の中核にいたからなのか、その他の理由（最後の藩主信古も大坂城代として幕末の動乱に加わっている）があるのかは判然としない。しかし、その名の欠落からは、逆説的ながら明治初期の模写時にまで影響を及ぼした、往時の吉田藩大河内松平家の威光を感じ取ることもできよう。

なお、アメリカ議会図書館所蔵版伊能大図には、城郭に城主名ではなく城郭名が記されている例が散見される（第1表）。このうち、松本城と鹿兒島屋形（現在の鹿児島県鹿児島市）は、それぞれ国立歴史民俗博物館蔵の伊能大図（明治初期にアメリカ議会図書館所蔵版と同じ原本から模写された別本と考えられる）、1811年までの第7次測量（九州第1次測量）を踏まえて一旦成果を完成させて幕府に提出した伊能らの原本が現存している『九州沿海図』（東京国立博物館蔵）の同じ図幅が参照可能で、それらには「松平丹波守居城」「松平豊後守居城」と記されている。このことから、アメリカ議会図書館所蔵版伊能大図の作者が模写にあたって参照した原本には城郭名ではなく城主名が記されていたものとみてよい。これらの城は、模写にあたってわざわざ原本にあった城主名を写さず、代わりに城郭名を書き加える手間を加えたことになる。城主名を城郭名に書き換えた理由は判然としないが、明治期の伊能大図の模写は原本の単純な模写ではなく、城主名・城郭名の書写に何らかの手心を加える、意図が込められたものであった

と指摘することはできる。

なお、城主名が城郭名に書き換えられた事例のうち、薩摩藩の居城鹿児島城は、第11図にあるように「鹿児島城」ではなく「鹿児島屋形」と実態に即して書き改められている（薩摩藩は大藩だが天守を備えた壮大な城郭を整備することはなく、藩主は城山の麓の簡素な館を居所としていた）ことから、アメリカ議会図書館所蔵版伊能大図の模写作業は薩摩藩関係者の影響下で実施されたものとも考えることもできる。そのことが彦根城や吉田城の城主名の欠落にどのような関係があるのかは類推するほかないが、異例というべき吉田城の城主名の欠落が、単なる偶然ではなく何らかの意図が背後にあってのものであることはほぼ確実といえよう。

Ⅲ おわりに

本稿では、アメリカ議会図書館所蔵版伊能大図第116号「吉田」の図幅を対象に、そこに描かれた内容の精読を通して、「吉田」の図幅の特徴と、その特徴が出された背景を明らかにすることを目的に検討を行ってきた。成果は次のようにまとめられる。

伊能大図「吉田」には、三河湾奥に「水中洲」と地名が付された長大な干潟と、東海道沿いに「立岩」という岩山がそれぞれ絵画的に描画されているが、これらの表現は極めて特異なもので、すべての伊能大図のなかでも唯一といってよい描かれ方をしている。これらの地物が「描かれたこと」自体が極めて異例のことであるが、全国の伊能大図のなかでも極めて異例の表現がひとつの図幅に重なることは偶然だとは考えられず、その点で「吉田」は特別な図幅だと指摘できる。

「吉田」が特別な図幅となった理由は直接の史料が不足しており現時点では解明できないが、老中首座松平信明が伊能測量当時の吉田藩主であったこと、吉田の伊能測量隊旧知の知識人斎藤一握父子の存在など、特別な図幅になるにふさわしい環境が存在したことは指摘できる。そして、その老中首座松平伊豆守の名が、吉田城の城主名から欠落していることには、伊能図の模写にあたって彦根城などと同様に城主名を抹消させた明治政府・陸軍の意図を感じることができる。今日われわれが見ることができるアメリカ議会図書館所蔵版伊能大図「吉田」は、伊能らの配慮と、明治政府側の配慮が積み重ねられた形で伝来しているものだけといえよう。

伊能忠敬らの『大日本沿海輿地全図』と一連の測量事業は、日本の地図・測量史において科学的手法に基づいた画期的な成果として高く評価されている。しかしながら、その科学性はあくまで当時の水準において画期的であるという意味であり、今日にそのまま通用する科学的手法が適用された成果というわけではない。地球が球体であることを知りながら結局厳密には表現できなかった地図投影法の試行錯誤⁷¹⁾や、積極的な経度測定を試みながら最終的には大きな誤差を含み科学的には「装飾」とみなすのが妥当な経度線の描画⁷²⁾、すでに西洋では確立されていた三角測量法を使えなかったことなど、今日の科学的観点からはもちろん、当時の世界的水準から見ても不十分・不完全な点は多々指摘できる。測量事業自体伊能の私的測量で始まったものが第5次測量から幕府直轄の全国測量に移行するなど目的やスタッフが大きく変わり、途中で方針も二転三転している。結果として完成された伊能図は、東日本と西日本では測量を行った路線の密度が全く異なり、東日本では御三家水戸城の測量もなされていないが西日本では各地の寺社まで測量線が及んでいるなど、内容の地域的な歪みも大きい。

伊能図は、それまでの日本の地図作成史の蓄積の上に、全国実測という新たな成果を組み合わせ進化・大成させようとした、試行錯誤あるいは妥協と継接ぎが積み重ねられた作品といえる。しかしながら、それらは新たなものの開拓にあたって必然的に現れる試行錯誤の跡であり、むしろ伊能図の各所に科学的な厳密性を確保しようとする苦闘の跡と、不完全で未熟な点、ある種の人間臭い配慮の跡（例えば水中洲や立岩の描画）が散見されること自体が、パイオニアとしての伊能図の魅力のひとつとなっている。本稿で取り上げたような、伊能図の特異な表現やその背後に見え隠れする伊能らの人間臭い配慮もまた伊能図を見る者を惹きつける魅力であろう。

もちろん、本稿で至らなかった論点は少なくない。本稿は「伊能大図第116号「吉田」の深読み」と銘打ってはいるものの、実際には水中洲等「吉田」図幅に描かれた事物のわずかの部分を扱えたに過ぎない。また、水中洲等の個別の描画内容の検討についても、鹿絵図や吉田側の記録等の関連史料の追及・確認等不足している点が多い。実際には閲覧可能なのに筆者が未参照の史料も多いことだろう。これらについては読者のご批判や更なる史料の発掘を待つほかない。

しかしながら、「吉田」1枚を取ってみてもこのように多大な積み残された部分や示されていない論点があることは、それだけ伊能図の読解の可能性が大きく開

けていることを示している。この10年で、かつて幕閣中枢クラスや軍首脳クラス、あるいは限られた研究者しか閲覧できなかった伊能図を、インターネット等でも自由に閲覧できるようになり、伊能図の読解に参加できる裾野は大きく拡大している。本稿では「吉田」を特に取り上げたが、他の全国のすべての図幅においても本稿と同等以上の「深読み」は可能であろう。専門研究者に限らない全国の人々が参加して、膨大で魅力あふれる伊能図の世界に向かい、地域史料を掘り起こしながら新たな視点で読み解き、その成果が広く共有されながら今後ますます蓄積していくことを望みたい。その一助として本稿が多少なりとも貢献できることを願う。

【注釈】

- 1) 渡辺一郎『伊能忠敬の日本地図』河出書房新社、2021、15-17。
- 2) 各種の研究は次の目録によくまとめられている。(1) 高木崇世芝編『伊能忠敬関係文献総目録—明治13年～平成26年—』イノペディアをつくる会、2016。(2) 中村宗敏「伊能忠敬研究文献目録」地図34-2、1996、60-67。最近の研究については地学雑誌129-2(2020年)が「伊能忠敬特集号」となっており、多分野の論考が寄せられていて論点の確認に役立つ。更に、本稿の脱稿(2021年11月)後だが、星埜による優れた展望論文も出された。(3) 星埜由尚「伊能図の科学技術的側面と分類体系に関する先学の業績と今後の課題」地図59-4、2021、1-15。
- 3) 星埜由尚「伊能忠敬特集号の刊行にあたって」地学雑誌129-2、2020、155-160。
- 4) (1) 松富英夫ほか「雄物川河口域海岸線の長短期的な変化動向について」海岸工学論文集55、2008、636-640。(2) 田中圭ほか「古地図・空中写真の解析による安政東海地震前後の富士川下流域の地形変化と蒲原地震山」地学雑誌127-3、2018、305-323。(3) 岩井優祈ほか「GISを援用した伊能図の空間分析—最近200年間の国土変化に着目して—」地学雑誌129-2、2020、215-226。(4) 岩井優祈・村山祐司「伊能図と現在地図のオーバーレイによる日本国土の地理的変化の考察」地理空間14-1、2021、19-35。
- 5) 前掲1)、173-282。
- 6) 伊能忠敬『伊能大図総覧』河出書房新社、2006。
- 7) 伊能忠敬著、渡辺一郎監修『伊能図大全』河出書房新社、2013。

- 8) 村山祐司監修『デジタル伊能図』河出書房新社、2015。
- 9) 国土地理院ホームページ「古地図コレクション 伊能図」。https://kochizu.gsi.go.jp/inouzu (2021年11月29日閲覧)。
- 10) 渡辺一郎・横溝高一「伊能忠敬の第一次測量—北海道図と最終伊能図(間宮図)の比較—」伊能忠敬研究 75、2015、1-19。
- 11) 前掲4)、(3)(4)。
- 12) (1) 野上道男『伊能大図における星測と横切測量・方位測量による導線位置の補正—第4次測量までの例—』地図 57-3、2019、1-13。(2) 野上道男「伊能大図の計測から見た導線位置の精度と補正—第6・7・8次測量の例—」地図 57-4、2019、1-12。(3) 野上道男「伊能忠敬の測量成果の地図化法」地理学評論 94-6、2021、427-449。(4) 野上道男「伊能大図における第4次・第5次測量の導線接合部における閉合差」地図 59-3、2021、1-13。
- 13) 214 図幅の伊能大図に関しては、伊能忠敬らが作成した一覽図が伝来しており、それぞれの図幅に伊能らが付した通し番号がわかっている。その116号にあたる図幅に伊能らによる名称はなく、『伊能図大全』では「豊橋」、国土地理院ホームページでは「三河 吉田 田原 西尾 尾張 知多郡」の名称がつけられている。本稿では、当時の地名を尊重しつつ、伊能大図の後裔といふべき『輯製 20 万分の 1 地図 豊橋』や図幅の大部分が一致する現行の『20 万分の 1 地勢図 豊橋』との整合性・連続性を重視して、本図幅に『吉田』の名称を用いる。
- 14) 河出書房新社編集部編『伊能図探検』河出書房新社、2018。
- 15) 小田匡保「現・世田谷区域大山街道における伊能忠敬測量隊の測量と地図等の記載内容」駒澤地理 55、2019、25-40。
- 16) 今尾啓介『地図帳の深読み』帝国書院、2019。
- 17) 前掲9)。
- 18) 渡辺一郎「伊能忠敬と伊能図」伊能忠敬 e 資料館。https://www.inopedia.tokyo/pupil/hand_02.html (2021年11月29日閲覧)。
- 19) 前掲1)、231-232。
- 20) ただし、江戸定府の大名の陣屋が伊能大図に描画されない例は少なくなく、大垣新田藩畠村陣屋が特殊例というわけではない。
- 21) 明治初期にアメリカ議会図書館所蔵版伊能大図と同じ伊能大図の副本から模写されたものと考えられている国立国会図書館所蔵版の伊能大図には、村落に領主名が記されたものが存在する。

- 22) 渡辺一郎『幕府天文方御用 伊能測量隊まかり通る』NTT 出版、1997、16。
- 23) 豊橋市美術博物館編『柴田家文書展 吉田藩士の地図コレクション—地域から世界をみる—』豊橋市美術博物館、2014、110。
- 24) 前掲 23)、119。なお、この図の作成に関わったと考えられている吉田藩士柴田善伸は、伊能忠敬の孫弟子（伊能の高弟渡辺啓次郎の弟子）にあたる人物である（前掲 23)、127)。
- 25) (1) 星埜由尚「大図 116 号より三河湾東部」伊能忠敬研究 69、2013、5。(2) 星埜由尚「第 116 号 豊橋」（伊能忠敬著、渡辺一郎監修『伊能図大全 6』河出書房新社、2013) 107-108。
- 26) 藤城信幸『図説 渥美半島—地形・地質とくらし—』シンプル、2019、42。
- 27) 前掲 14)、50。
- 28) 前掲 8)。
- 29) 豊橋市史編集委員会編『豊橋市史（別冊を含めて全 9 巻）』豊橋市、1973-1991。
- 30) 牟呂史編纂委員会編『牟呂史』牟呂校区総代会、1996。
- 31) 前掲 26)、42。
- 32) 前掲 25)、(1)。
- 33) 前掲 25)、(1)。
- 34) 気象庁ホームページ。https://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/db/tide/suisan/suisan.php?stn=G4 (2021 年 11 月 29 日閲覧)。
- 35) 前掲 4)、(3) (4)。
- 36) 清水靖夫「伊能図と近現代の地図との違い」（東京地学協会編『伊能図に学ぶ』朝倉書店、1998) 130-132。
- 37) 鶴見英作「伊能図の読み方」（東京地学協会編『伊能図に学ぶ』朝倉書店、1998) 79-105。
- 38) 前掲 1)、101-104。
- 39) 『続徳川実記』1804 年（文化元年）9 月 6 日。
- 40) 高澤憲治『松平定信』、吉川弘文館、2012、210-212。
- 41) 前掲 1)、153。
- 42) 小宮山楓軒『懷宝日札 11・12』、国立国会図書館デジタルコレクション。https://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/2560476 (2021 年 11 月 26 日閲覧)。
- 43) 前掲 1)、181。
- 44) 前田幸子「伊能忠敬の未公表書簡 (2)」伊能忠敬研究 91、2020、1-8。

- 45) 前掲 44)。
- 46) 安藤由紀子「伊能忠敬と刀」伊能忠敬研究 25、2001、31-35。
- 47) 前掲 9)。
- 48) 前掲 9)。
- 49) ただし、大和郡山城が立地する図幅の伊能大図は後世の模写図しか伝来しておらず、模写時に改変が加えられた結果である可能性も否定はできない。
- 50) 渡辺一郎「忠敬に信頼された測量先の協力者たち—福岡の国学者・青柳種信のこと—」伊能忠敬研究 63、2011、23-27。
- 51) 鈴木純子「伊能忠敬の測量事業にともなった学術的交流」地学雑誌 129-2、2020、161-179。
- 52) 前掲 51)。
- 53) 佐藤閑翠「数学ノ先覚者 齋藤一握」(愛知県教育委員会編『愛知県教育史資料編 近世 2』第一法規、1984) 223-232。
- 54) 前掲 53)。
- 55) 佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記 1』大空社、1998、22。
- 56) 川崎倫代「加賀藩天文学者西村太沖 (一)」伊能忠敬研究 28、2002、28-33。
- 57) 伊能忠敬研究会編『伊能忠敬未公開書簡集』伊能忠敬研究会、2004、9。
- 58) 安藤由紀子「忠敬と間宮林蔵 (1)」伊能忠敬研究 29、2002、20-23。
- 59) 前掲 55)、37-38。
- 60) 前掲 53)。
- 61) 前掲 53)。
- 62) 前掲 53)。
- 63) 豊橋百科事典編集委員会編『豊橋百科事典』豊橋市、2006、412。
- 64) 前掲 8)。
- 65) 児玉幸多監修『東海道分間延絵図 12 解説篇』東京美術、1982、11。
- 66) 佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記 2』大空社、1998、23-24。
- 67) なお、筆者は『歴史地理』の原本を閲覧できていないが、『伊能忠敬研究』38号に写真が再掲されているので、これで確認した。鈴木純子「伊能忠敬大日本沿海輿地全図(大図) —出雲伯耆地方—」伊能忠敬研究 38、2004、32-34。
- 68) 鈴木純子「表紙図解説 米国議会図書館蔵伊能大図第 155 号 松江(部分)」伊能忠敬研究 56、2009、巻頭。
- 69) 星埜由尚「本書に収蔵された伊能大図」(伊能忠敬著、渡辺一郎監修『伊能図大全 6』河出書房新社、2013) 41-43。

- 70) 大名家の居城であっても、城郭として絵画的（写實的）に描画されておらず、旗本の陣屋と同じように屋敷として描画されているものは除外した。また、江戸城も城門は描かれているが城郭自体は描かれず空白になっているので除外している。
- 71) 菱山剛秀「伊能図の投影に関する疑問」地学雑誌 129-2、2020、303-314。
- 72) 羽田野正隆「伊能図の評価と今後の課題」（東京地学協会編『伊能図に学ぶ』朝倉書店、1998）164-175。